

# 『今昔物語集』の「飲」の 訓釈「すする」「のむ」について

南 波 千 春

〔キーワード：①『今昔物語集』 ②飲 ③のむ ④すする〕

## 1. はじめに

12世紀前半に成立した『今昔物語集』（以下『今昔』と記す）は、中古・中世における日本語の研究、中でも語彙と文体について研究を行う際の貴重な資料である。研究が進んだ現在においても、さまざまな問題を、日本語研究に提起してくれる資料でもある。

『今昔』は、漢字表記語の訓が諸注釈書でゆれが見られ、読みが確定していない語彙がいまだ少なくない。訓の確定は、『今昔』の読解はもとより、広義の古代語の語彙と文体の研究にとっても、基礎的で重要なことである。

日野（2002）は、「同一作品に対する二つ以上の注釈書の同一部分に異訓があれば、国語学における語彙研究、特に類義語研究の立場から検討して、「その決着をつけること」が望まれる」と述べている。また、日野（2002）には、「先学の貴重な御研究の意義を十分に理解した上で、実例に基づく追求を進めることにより、異訓による不統一を正して、一定の訓に統一できるのではないか」ともある。

本稿は、そのような目的を共有する訓釈研究の1つとして、日野氏や安部・伊藤（2008）、栗原・安部（2009）等の研究に連なる研究である。

具体的には、『今昔』における、「口から液体を入れる」ことを表していると考えられる漢字表記語彙「飲」を取り上げる。「飲」の漢字について、代表的な5つの注釈書での訓釈異同表を提示し、そこに見られる異同から、『今昔』での訓釈の問題について論じてみたい。

まず、『新日本古典文学大系』（以下『新大系』）、『日本古典文学大系』（以下『旧大系』）、『新編日本古典文学全集』（以下『新全集』）、『日本古典文学全集』（以下『旧全集』）、『日本古典集成』（以下『集成』）の5つ注釈書で、「飲」の訓を比較したところ、「のむ」と「すする」の2つの読み方で揺れている箇所が6箇所あった。この6つの異同について、各用法と読みを諸注釈や辞書、他作品における「のむ」と「すする」の使

(2)

用例を比較、考察を行うことによって、『今昔』において異同のある「飲」の訓の統一を試みるとともに、中古・中世の「のむ」と「すする」の意味的使い分けを明らかにする。

なお、『今昔』では、漢字「啜」の使用はなく、「飲」の用例しかなかった。また、今回の目的は『今昔』における「飲」の訓の確定と、「のむ」と「すする」の意味的使い分けを考察する事にあるため、漢字「呑」の用例は考察から除外した。

## 2. 『今昔物語集』における「飲」

『新大系』の語彙索引より、『今昔』における動詞「飲」を抜き出し、5種類の注釈書を比較したものが[表1]である。網掛けになっている用例は、異同が見られた6箇所である。

[表1] 注釈書比較

No	巻	話	本文	対象	旧大系	新大系	旧全集	新全集	集成
1	2	6	飲給ヒツ	水	のみ給ヒツ	のみ給ヒツ			
2	4	17	飲シメ	血	のましメ	のましメ			
3	4	25	飲テ	水	のみテ	のみテ			
4	5	11	飲テ	水	のみテ	のみテ			
5	5	17	飲ム	乳ノ様ナル物	のム	のム			
6	7	32	飲ム	湯	のム	のム			
7	10	32	飲ミツ	酒	のみツ	のみツ			
8	11	32	飲テ	水	のみテ	のみテ	のみテ	のみテ	
9	11	32	飲ムニ	水	のムニ	のムニ	のムニ	のムニ	
10	15	42	飲ナド	酒	のみナド	のみナド	のみナド	のみナド	
11	16	20	飲テ	酒	のみテ	のみテ	のみテ	のみテ	
12	19	44	飲ム	乳	のム	のム	のムニ	のム	
13	20	34	飲レヨ	汁	のまレヨ	すすレヨ	すすレヨ	すすレヨ	
14	20	21	飲ム	湯	のム	のム	のムニ	のム	
15	22	7	飲給ヒテ	酒	のみタマヒテ	のみタマヒテ	のみたまヒテ	のみたまヒテ	のみ
16	24	31	飲ムト	酒	のム	のム	のムニ	のム	のム
17	24	31	飲ツ	酒	のみツ	のみツ	のみツ	のみツ	のみツ

18	24	31	飲ム	酒	のム	のム	のムニ	のム	のム
19	24	36	飲ケル	酒	のみケル	のみケル	のみケル	のみケル	のみケル
20	24	36	飲ミ	酒	のみツ	のみ	のみ	のみ	のみ
21	25	4	飲テ	酒	のみテ	のみテ	のみテ	のみテ	のみテ
22	25	5	飲ム	酒	のム	のム	のムニ	のム	のム
23	25	5	飲テ	酒	のみテ	のみテ	のみテ	のみテ	のみテ
24	25	5	飲ナド	酒	のみナド	のみナド	のみナド	のみナド	のみナド
25	25	13	飲ナム	酒	のみナム	のみナム	のみナム	のみナム	のみナム
26	25	13	飲ムニ	酒	のムニ	のムニ	のムニ	のムニ	のムニ
27	25	13	飲ツ	酒	のみツ	のみツ	のみツ	のみツ	のみツ
28	26	17	飲テ	いも粥	のみテ	すすりテ	のみテ	のみテ	のみテ
29	26	13	飲ン	酒・粥	のましム	のまん	のまん	のまん	のまん
30	27	13	飲ナド	酒	のみナド	のみナド	のみナド	のみナド	のみナド
31	28	18	飲ツレバ	湯	のみツレバ	すすりツレバ	のみツレバ	のみツレバ	のみツレバ
32	28	20	飲スレバ	粥	のますレバ	すすらスレバ	すすらせヌレバ	すすらせヌレバ	のますレバ
33	28	20	飲ル	粥	のめル	すすル	すすル	すすル	のめル
34	30	1	飲ル	水	のめル	すすル	すすル	すすル	のめル
35	31	13	飲ム	泉の水	のまム	のム	のまム	のム	のまム

異同が見られる6つの用例全てにおいて、『新大系』は「すする」の訓を当てているのに対し、『旧大系』と『集成』（『集成』は本朝世俗部のみであるため用例番号13については用例無し）は全ての用例を「のむ」と訓を当てていることが分かる。

### 3. 「のむ」と「すする」の意味分析

#### 3. 1. 辞書類における「のむ」と「すする」

まず、古辞書を調査したところ、『類聚名義抄』、『色葉字類抄』ともに、「飲」という漢字表記で「すする」と読む事例は見られない。

『類聚名義抄』では、「飲」の訓として、「ノム ナム ミヅカラ ツ、シム 和（音）オム」と記され、「啜」には、「音綴 又 樹雪反 ス、ル スフ」とある。

『色葉字類抄』では、「飲」に「ノム 於帝反」とあり、「啜」には「ス、ル常<sub>臣</sub>少カ

(4)

ニ反及也」とある。

なお時代がやや降るが参考まで見ておくと、『日葡辞書』における「のむ」「すする」の関連項目は以下のように書かれている。

Nomi, u, oda. ノミ、ム、ウダ（飲・呑み、む、うだ）飲む。また（呑む）、噛み砕くための歯をもたない蛇とかその他の動物とかが食う。

Nomifataxi, su, aita. ノミハタシ、ス、イタ（飲み果たし、す、いた）飲んでしまう。

Nomifoxi, su, iota. ノミホシ、ス、イタ（飲み干し、す、いた）少しも余さないで、すっかり飲む。

Nomicomi, u, oda. ノミコミ、ム、ウダ（呑み込み、む、うだ）呑み下す。

Nomicui, u, uta. ノミクイ、ウ、ウタ（呑み食ひ、ふ、うた）食べものを噛まないで呑み下す。

Susuri, u, sutta. ススリ、ル、ツタ（啜り、る、つた）吸う、あるいは、啜り込む。

例、Cayuuo susuru.（粥を啜る）粥を啜る。

以上の記載は、現在の簡略な国語辞書の記載と大差ない。

次に、『日本国語大辞典 第二版』『角川古語大辞典』『時代別国語大辞典 室町時代編』『時代別国語大辞典 上代編』の4種類の辞書における「のむ」と「すする」の説明を見ておく（表2はそれらの辞書での語釈を引用したものである。）

〔表2〕辞書による「のむ」と「すする」の説明

	のむ	すする
日本国語大辞典 第二版	【飲・一】他マ五（四） ① 口に入れて喉に下し胃に送りこむ。液体などを喉に流しこむ。	【啜】他ラ五（四） ① 音をたてて液汁を口に吸い入れる。飲み入れる。 ② 垂れた涙や鼻水を息とともに吸いこむ。
角川古語大辞典	【飲・一】動マ四 ① 液体を口に入れ、喉へ下し、胃へ送る。 ④ 固形物をかまらずに腹に収める。	【啜】動ラ四 「すす」は擬音語に基づく。 ① 液状のものを、音を立てて吸い込むように口に入れる。
時代別国語大辞典 室町時代編	【飲む・一む】動四 ① 液体を、口から喉を通して胃におさめる。また特に、酒に	【啜る】動四 液状のものを、口、または、鼻から、音をたてて強く吸いこむ。

	ついでということが多い。 ② 固形物を、噛まずに丸ごと喉を通し体内に取込む。	
時代別国語大辞典 上代編	【飲・一】動四 飲む。特に飲酒を意味することがある。	記載なし

これら4種類の辞書からは、「のむ」は、単に口から胃へ液体などを流し込むことを意味するが、それに対し「すする」は、『角川古語大辞典』に「「すす」は擬音語に基づく。」とあることから分かるように、音をたてて吸い込むことを意味すると解釈されていることが分かる。ここから、「のむ」と「すする」の2語の違いの1つに音が関係していることが考えられる。

### 3. 2. 「のむ」と「すする」の用法

次に、『今昔』における「のむ」と「すする」が、どのような場面で用いられているのか、その用法を比較する事で、その使い分けを考察する。表3は、何を「のむ」もしくは「すする」のか、その対象物を示したものである。

[表3] 動作の対象物

No	巻	話	前置句	本文	対象
1	2	6	迦葉此ノ水ヲ受けテ	飲給ヒツ	水
2	4	17	血ヲ出シテ婆羅門ニ	飲シメ	血
3	4	25	先ヅ水ヲ	飲テ	水
4	5	11	此ノ水ヲ	飲テ	水
5	5	17	其レヨリ人ノ乳ノ様ナル物、只涌キニ涌キ泛ル。其ノ時ニ、児寄テ其ヲ	飲ム	乳ノ様ナル物
6	7	32	僧共、此ノ器ニ盛レル湯ヲ取テ、…(中略)…無限シ。	飲ム	湯
7	10	32	此ノ酒・肴ヲ荷ヒ持テ通ルヲ、奪ヒ取テ吉ク	飲ミツ	酒(・肴)
8	11	32	食物無シト云ヘドモ、谷ノ水ヲ	飲テ	水
9	11	32	将監自ラ其水ヲ	飲ムニ	水
10	15	42	物食ヒ酒	飲ナド	酒
11	16	20	前ナル女房ナド皆物食ヒ酒ナド	飲テ	酒
12	19	44	狗、児ニ乳を吸スル也ケリ。児、人ノ乳ヲ飲ム様ニ、糸吉ク	飲ム	乳

(6)

13	20	34	此ノ汁	飲レヨ	汁
14	20	21	実ニ此ヲ思ニ、譬ヒ銅ノ湯ヲ	飲ム	湯
15	22	7	酒ナド進タレバ、其レモ	飲給ヒテ	酒
16	24	31	「我レ酒	飲ムト	酒
17	24	31	「我レ酒飲ムト知タル也ケリ」ト思フニ可咲シ。然テ	飲ツ	酒
18	24	31	「我レ酒飲ムト知タル也ケリ」ト思フニ可咲シ。…(中略)…「情無カハ」トテ、度々飲ム酒		
19	24	36	天ノ河原ト云所ニ下リ居テ、酒など	飲ケル	酒
20	24	36	其後、御子返リ給テ、中將ト終夜酒	飲ミ	酒
21	25	4	介ハ遠キ道ニ来リ極ジテ、酒ナド吉ク	飲テ	酒
22	25	5	先ヅ酒ヲ涌シテ手毎ニ取テ	飲ム	酒
23	25	5	喉ノ乾クマヽニ、空腹ニ酒ヲ四五杯	飲テ	酒
24	25	5	物食、酒	飲ナド	酒
25	25	13	一ノ屋ニ多クノ酒有リ。歩兵等此レヲ見テ喜テ、急テ	飲ナム	酒
26	25	13	一ノ屋ニ多クノ酒有リ。…(中略)…雑人ノ中ニ一両蜜ニ此ヲ	飲ムニ	酒
27	25	13	一ノ屋ニ多クノ酒有リ。…(中略)…然レバ軍拳テ此レヲ	飲ツ	酒
28	26	17	此五位、其座ニテ暑預粥ヲ	飲テ	(いも)粥
29	26	13	「其酒・粥ヲ皆	飲ン	酒・粥
30	27	13	万ノ遊ヲシテ、物食酒	飲ナド	酒
31	28	18	既ニ食畢テ、湯ナド	飲ツレバ	湯
32	28	20	粥ヲ	飲スレバ	粥
33	28	20	粥ヲ	飲ル	粥
34	30	1	薄香ノ色シタル水半許入タリ。(中略)…筥ヲ引寄セテ少シ	飲ル	水
35	31	13	此ノ泉ヲ	飲ム	泉(の水)

2語それぞれの対象物となっているものは、酒が18例(うち1例は酒と粥)、水が7例、粥が3例、湯が2例、乳(もしくは乳のようなる物)が2例、血が1例、汁が1例、湯が1例、であった。

その内、訓が揺れている6例の対象物は、粥が3例(うち1例は酒と粥)、汁が1例、湯が1例、水が1例である。中でも、粥や汁は出現用例の全てが訓の異同のある用例に

なっていることが分かる。

網掛けで示した異同のある6例については4で検討することにし、まず、かな書きで読みが確定できる他作品によって「すする」の用法を検討しておくことにする。

### 3. 3. 他作品における「すする」

『今昔』における6例の「飲」の訓の異同が「のむ」と読むべきであるのか、それとも「すする」と読むべきであるのかを考えるために、ここでは、「のむ」と「すする」の2つの動詞が、どのような意味的な使い分けがなされていたのかを考察しておくことにする。

多くの用例で使用場面を検討していくために、『今昔』以外の中古・中世の作品から「のむ」と「すする」を抜き出し、考察を行う。なお、近世の作品である『雑兵物語』においても興味深い「すする」の例が見られたので、考察に含めた。

『今昔』以外の作品の索引から「のむ」と「すする」を調べたところ、34作品中<sup>1</sup>、「すする」の用例があったものは、以下に用例を挙げている5作品13例のみであった。

なお、以下の5作品以外においては、『源氏物語』に3例、『御伽草子』に1例、「すする」の用例があったが、「鼻をすする」という例であった。「鼻をすする」の例は、「鼻から」であって、「口から入れる」動作には該当しないので今回の考察からは除外するが、意味的に「少しずつ」「水とは異なるものを」「音を立てて」という意味的特徴の点では、本稿で結論とした「すする」の意味的特徴とも一致しているものである。

#### ①『宇津保物語』における「すする」

『宇津保物語』には「すする」の用例が2例あった。

かくて、致仕の大臣、かゝることを聞きて、水もすすらで、泣く／＼いふほどに、「われ、むかしより食ふべきものも食はず、着るべきものも着ずして、天下ニ謗られを取り、世界に名を施して、財を蓄へしことは、死ぬべき命なれど、難きことも財持たる人は心に叶ふものなり。今ハ大臣の位を絶ちて、たゞ思ふことこの事一つなり。それ叶はずば、今は我が財あるにかひなし」とて、七条の家四条の家ヲはじめて、かたはらより火をつけてかたときに焼亡ぼして、山に籠りぬ。(卷十 あて宮)

みな御ぜんにとりすへたり。おとゞたちけうじ給て、「まづこのかゆすすりてん」とて、そへたりつきどもによそひて、みなまいる。(卷十三 蔵開上)

以上の2例は、1例が水で、1例が粥である。

1例目の水の例については、あて宮への恋煩いにより、「食ふべきものも食はず、着

(8)

るべきものも着ず」財を貯めていたが、あて宮が東宮に入内したことによって、心叶わず、苦しくて水も喉を通らないという状況の描写である。ここから、心理的に苦しく、少しの水すら飲む力もないという勢いに欠けた様子を表している。『新全集』の現代語訳にも「あて宮入内のことを耳にして、湯水も喉を通らず、泣く泣くいうことには、…」と訳されている。ここから、少しの水も喉を通らないという強調をするために、「飲む」という表現より、少しずつ口に入れることを強調するために「すする」が使用され、勢いや力のない様子や、さみしく苦しい心理を表していると考えられる。

2例目の、実際に「口に入れる」動作をしている「すする」については、「かゆ」である。『日葡辞書』の「すする」の例として「粥を啜る」とあることから、よく使用されていた典型的表現と考えられる。

## ②『宇治拾遺物語集』における「すする」

『宇治拾遺物語集』には「すする」の用例が4例あった。以下、その4例であるが、いずれも『今昔』に類話があるものである。同じ物語が、和文資料である『宇治拾遺物語集』では「のむ」と「すする」のどちらで読まれているのかを確認することで、『今昔』での訓を特定する大きな手がかりとなる。

そのおろし米の座にて、芋粥すすりて、舌打ちをして、「あはれ、いかで芋粥にあかむ」と云ければ、…（巻一ノ一八）

この用例は、『今昔』のNo.28の類話である。（『今昔』の用例番号は、[表1][表3]の番号である。）

この童、鼻もてあげの木をとりて、うるはしく向みて、よきほどに、高からず低きからずもたげて、粥をすゝらすれば、この内供、「いみじき上手にて有けり。例の法師にまさりたり」とて、粥をすゝる程に、この童、はなをひんとて、そばざまにむきて鼻をひるほどに、…（巻一ノ二五）

この用例は、『今昔』のNo.32、33の類話である。

つぶ〜ときり入れて、煮て食て、「あやしう、いかなるにか。こと鯰よりもあちはひのよきは、故御房の肉なれば、よきなめり。これが汁すゝれ」など、あひして食ける程に、えう〜といひける程に、とみに出ざりければ、苦痛して、遂に死侍り。（巻一ノ一六八）

この用例は、『今昔』のNo.13の類話である。

以上の『宇治拾遺物語集』前後の時期には類似の作品が多い。『宇治拾遺物語集』の4つの用例を含む説話については、『今昔』と類話であり、いずれかの影響関係か、同一説話を元にする共通説話等の関係と推定される。よって、『宇治拾遺物語集』において仮名書きで「すする」と表現されているNo.13、28、32、33の用例は、「すする」によって表わされていた動作である蓋然性が高いと言えよう。

さらに、以上の4例は、3例の対象物が粥、1例が肉の入っている汁で、すべて汁の中に固形物が入っている例であることが分かる。固形物が入っている場合は、そのまま飲んで喉につかえかねないので少しずつ飲み込む動作になるために、「すする」で表現されているものと考えられる。

### ③『海道記』における「すする」

『海道記』には「すする」の用例が1例あった。以下の用例がそれである。

空腹一杯の粥、飢ゑてすすれば余りの味あり。(序)

### ④『太平記』における「すする」

『太平記』には「すする」の用例が5例あった。以下、その5例である。

霸王、諸侯を集めていけにへを殺し、血を啜りて、二心無からん事を誓ふ。(巻九)

互ひに国の境に出て会ひて、羊を殺してその血を啜り、天神・地祇に誓ひて、…会盟、事いまだ定まらず、血いまだ啜らざる先に、秦王、宴を設けて…(巻二六)

秦を滅ぼして天下を救はんために、義帝の御前にして血を啜りて約せし時、…(巻二八)

魚夫笑ひて、「衆人皆酔へらば、なんぞその糟を喰らひてその汁を啜らざる」と…(巻三九)

以上、「すする」の5例は「啜」で表記されているが送り仮名からも「すする」の用例であることがわかる。この5例の「すする」のうち4例が「血をすする」で、1例が「汁をすする」であった。「血」を、口をつけて少しずつ吸い取るような飲み方をする時と、固形物が入った液体を口に入れる行為の時に使われていることがわかる。

(10)

⑤『雑兵物語』における「すする」

近世の例になるが『雑兵物語』には「すする」の用例が1例あった。

梅干をみてもまだ喉かかはおへいならば、死人の血ても、又はどろのすんだ上水ても、すゝつて居なされい。(上 鐵炮足輕小頭)

以上の5作品での12例の「すする」について、対象物を表4にまとめた。

[表4] 他作品における「すする」の対象物

作品	対象物	「すする」の形
宇津保物語	水	すすらで
宇津保物語	かゆ	すすりてん
宇治拾遺物語集	芋粥	すすりて
宇治拾遺物語集	粥	すすらすれば
宇治拾遺物語集	粥	すする程に
宇治拾遺物語集	汁	すすれ
海道記	粥	すすれば
太平記	血	吸りて
太平記	血	吸り
太平記	血	吸らざる
太平記	血	吸りて
太平記	汁	吸らざる
雑兵物語	どろのすんだ上水	すすって

『今昔』以外の作品で「すする」の用例を検索した結果、「すする」という語の用例が大変少なく、現れた5種類の作品13例の用例から「すする」を取り出してみると、「すする」という動作を受けている物は、粥、汁、水、血と限られている事が分かる。

3. 2. で『今昔』の中で「飲」の訓の異同が見られた語も、対象物が、粥、汁、湯、水であり、大部分に重なりが見られた。

以上のような用例を見ていくと、3. 1. で見てきた辞書の説明が分かる。粥や汁のようにとろみのある液体、もしくは固形物の入っている液体を口に入れる場合は、掻き込んだり、固形物を一旦止めたりするため音が立つのだろう。また、粥や汁は熱いことから、少量ずつ吸い込むとも考えられる。また、『太平記』の血の用例や、『雑兵物語』の用例に関しても、コップで水を飲むように一度に多くの水を口に含む、または流し込

むのではなく、自分の口を寄せて、少量の液体を吸い込む状況であるので、音が立つと考えられる。

このようなことから、「すする」が使用される語や状況が限られると考えられる。

#### 4. 『今昔物語集』における「飲」の訓の異同

以上の「のむ」と「すする」の用法の調査を踏まえ、『今昔』の5つの注釈書で異同のあった6つの用例について、どちらの読みが妥当であるのかを考察していく。

次に、訓が注釈書によって異同があるものについて、文脈から考察をしていく。

	巻	話	本文	旧大系	新大系	旧全集	新全集	集成
13	20	34	飲レヨ	のまレヨ	すすレヨ	すすレヨ	すすレヨ	

其ノ後、浄覚ガ云ク、「怪（アヤシ）ク、何（イカ）ナルニカ有ラム、他ノ鯰ヨリ殊ニ味（アヂハヒ）ノ甘（ウマ）キハ。故別当ノ肉村（シシムラ）ナレバ、吉キナメリ。此ノ汁飲レヨ」ト妻（メ）ニ云テ、愛（アイ）シ食ケルニ、大キナル骨浄覚ガ喉（ノムド）ニ立テ、エフ〜ト吐迷（ハキマドヒ）ケル程ニ、骨不出（イデ）ザリケレバ、遂ニ死（シニ）ケリ。然レバ、妻、心疎（ココロウ）ガリテ、此ノ鯰ヲ不食（クハ）ザリケリ<sup>2</sup>。（巻20の34話『新大系』290頁）

『旧全集』の注に、「伊<sup>3</sup>スの人事「啜…飲已上同」により、「すすレヨ」と読む。」とある。

このNo.13の用例は、「レヨ」という送り仮名があることから、「レ」を助動詞と考えることは難しく、「すする」の語幹と考えた方が自然ではないだろうか。

さらに、この説話は『宇治拾遺物語集』にも入っており、そこでは「すする」と読まれていることや、肉の入った汁物（羹のようなもの）であるので、音を立てて口に入れていると考えられることから、『新大系』・『旧全集』・『新全集』の「すする」という訓が妥当だと考える。

	巻	話	本文	旧大系	新大系	旧全集	新全集	集成
28	26	17	飲テ	のみテ	すすりテ	のみテ	のみテ	のみテ

其大饗ノ下（オロシ）、侍共ノ食（クヒ）ケル中ニ、此（コノ）五位、其（ソノ）座ニテ、暑預粥（イモガユ）ヲ飲テ舌打（シタウチ）ヲシテ、「哀（アハ）レ、何（イ）カデ暑預粥ニ飽（ア）カン」ト云（イヒ）ケレバ、利仁、此（コレ）ヲ聞テ、

(12)

「大夫殿（タイフドノ）、未（イマ）ダ暑預粥ニ飽（アカ）セ不給（タマハヌ）カ」ト云へバ、五位、「未ダ不飽侍（アキハベラズ）」ト答フ。（巻26の17話『新大系』69頁）

『新大系』の注に、「〔のみ〕と読むも可。宇治拾遺「すゝりて。」とある。

No.28において、『新大系』の注にもあるように、No.13と同様、『宇治拾遺物語集』にも類話がある説話であり、そこでは「すする」と読まれていることや口に入れているものが、イモ粥であることから、音を立ててかきこむ様子であると考えられる。

また、対象物が粥の場合、「すする」が使用される可能性が高いことは、他作品で、芋粥を「すする」で表現している例が1例、粥を「すする」で表現している例が4例あることから、『新大系』の「すする」という訓でよいのではないだろうか。

	巻	話	本文	旧大系	新大系	旧全集	新全集	集成
31	28	18	飲ツレバ	のみツレバ	すすりツレバ	のみツレバ	のみツレバ	のミツレバ

既ニ食畢（クヒハテ）テ、湯ナド飲ツレバ、房主、「今ハシ得（エ）ツ」ト思テ、今ヤ物突迷（ツキマド）ヒ、頭ヲ痛ガリ狂フト、心モト無ク見居タルニ、惣（スベ）テ其ノ気色モ無ケレバ、極（イミジ）ク怪（アヤ）シト思フ程ニ、（巻28の18話『新大系』227頁）

No.31については、『新大系』の注に、「〔のみ〕と読むも可。「飲スレバ」（231頁注24）、「飲ル」の例などを勘案してかく読む。」とある。231頁の24には、「古辞書類に根拠は得られないが「飲」字には「のむ」のほかにこの訓が宛てられる。宇治拾遺「すゝらすれば。」とある。

このことから、No.31については、今回調査した『今昔』以外の作品から「湯をすする」という用例はでてこなかったことや、送り仮名も「つれば」のみであることから、「すする」であると主張する根拠がないため、「のむ」とした方が妥当ではないかと考える。しかし、食後に飲む湯であることを鑑み、食事に使用した器に湯を注ぎ、残った食べ物を粥状にして飲んでいる可能性もある。また、熱い湯を少しずつ吸い込む状況であるのであれば、新大系の「すする」という可能性も考えられる。

	巻	話	本文	旧大系	新大系	旧全集	新全集	集成
32	28	20	飲スレバ	のますレバ	すすらすレバ	すすらせヌレバ	すすらせヌレバ	のマスレバ
33	28	20	飲ル	のめル	すすル	すすル	すすル	のメル

童鼻持上（ハナモタゲ）ノ木ヲ取テ、直（ウルハ）シク向（ムカヒ）テ、吉キ程ニ高ク持上テ、粥ヲ飲スレバ、内供、「此ノ童ハ極（イミジ）キ上手（ジヤウズ）ニコソ有ケレ、例ノ法師ニハ増（マサリ）タリケリ」ト云テ、粥ヲ飲ル程ニ、童、顔ヲ喬（ソバザマ）様ニ向（ムケ）テ、鼻ヲ高ク簸（ヒ）ル。其ノ時ニ、童ノ手篩（フルヒ）テ、鼻持上（モタゲ）ノ木動（ウゴキ）ヌレバ、鼻□テ粥ノ鏡（カナマリ）ニフタト打入（ウチイ）レツレバ、粥□テ内供ノ顔ニモ童ノ顔ニモ多ク懸（カカリ）ヌ。  
（巻28の20話『新大系』231頁）

『旧全集』の注には、No.32について、「底本「ヌ」をいかしてよむ。宇治拾遺「粥をすすらすれば。」とある。また、No.33については、「のめル」ともよめるが、完了の助動詞「リ」では意味が通じにくい。宇治拾遺「すする」により、かくよむ。」とある。

また、No.31の項でも引用した注の中にあるが、『新大系』の注によると「のみ」の読み方でも可能であるとある。

さらに、『新全集』の注には、「底本「ヌ」をいかして読む。『宇治拾遺』「粥をすすらすれば。」とあり、「すする」と読んでいる。

No.32、33は、1つの場面であり、共通の読み方がふさわしく、No.13や28と同様に、『宇治拾遺物語集』の読みや、口に入れているものが粥であることを考え、『新大系』『旧全集』『新全集』の「すする」という訓がよいと考える。

	巻	話	本文	旧大系	新大系	旧全集	新全集	集成
34	30	1	飲ル	のめル	すすル	すすル	すすル	のメル

心モ不得（エ）ズ怪ク思（オボエ）テ、□管ノ内ヲ臨（ノゾ）ケバ、薄香（ウスカウ）ノ色シタル水半許（ナカラバカリ）入タリ。亦（マタ）大指（オホユビ）ノ大（オホキ）サ許（バカリ）ナル物ノ黄黒（キクロ）バミタルガ、長（ナガサ）二三寸許（バカリ）ニテ、三切許（ミキレバカリ）打丸（ウチマロ）ガレテ入タリ。「思フニ然（サ）ニコソハ有ラメ」ト思テ見ルニ、香（カ）ノ艶（エモイハ）ズ馥（カウバ）シケレバ、木ノ端（ハシ）ノ有ルヲ取テ、中ヲ突差（ツキサ）シテ、鼻ニ宛（アテ）テ聞（カ）ゲバ、艶（エモイハ）ズ馥（カウバ）シキ黒方（クロバウ）ノ香ニテ

(14)

有り、惣（ス）ベテ心モ不及（オヨバ）ズ。「此レハ、世ノ人ニハ非（アラ）ヌ者也ケリ」ト思テ、此レヲ見ルニ付（ツケ）テモ、「何（イ）カデ此ノ人ニ馴睦（ナレムツ）ビムト思フ心、狂フ様（ヤウ）ニ付（ツキ）ヌ。筥（ハコ）ヲ引寄（ヒキヨ）セテ少シ引飲ルニ、丁子ノ香ニ染返（シミカヘリ）タリ。（巻30の1話『新大系』395頁）

『旧全集』と『新全集』の注には、「伊スの人事「啜ス・ル…飲已上同」によって読む。」とあり、「すする」と読んでいる。

No.34については、「引飲ル」という形であることが気になるが、辞典類や他の作品を探してみても「引飲」「ひきのむ」「ひきすする」といういずれの記載もなく、どのような動作であるのか分からない。また、飲んでいる液体も、「薄香ノ色シタル水」とあり、「のむ」であるか「すする」であるのか、判断しにくい。

しかし場面を考えると、「三切許打丸ガレテ入タリ」と得体の知れない固形物が入っている液体であることや、大きな箱を引き寄せ、箱に口を寄せ、恐る恐る得体の知れない液体を口に入れていた様子から、『新大系』『旧全集』『新全集』の「すする」という訓が妥当なのではないかと考える。

## 5. おわりに

本稿では、『今昔物語集』を材料にしつつ、中古・中世の、主に「すする」の意味を検討し、それを通して『今昔物語集』の諸注釈書における訓を再検討してみた。

『今昔物語集』における「飲」の訓の6箇所異同は、No.31の「飲」以外は、「すする」という訓が適切であると判断した。その理由としては、「すする」という語は、口にする対象物や状況が限られており、5つの用例は、それに当てはまるものであったからである。

今回の考察から、「すする」という語が使用されやすい対象物は、「固形物が入っている液体、もしくはとろみがある熱い液体である粥や汁」がまずは挙げられる（鼻水もそれに準じるものと考えられるであろう）。次に、器がなく、「自分の口を寄せて少量の液体を吸い込む状況」が挙げられる。この場合、血が対象物になった用例が、現れやすかったようである。一方、『今昔物語集』において、No.2が血を飲む例であるが、ここでは、「血ヲ出シテ婆羅門ニ飲シメ」とあり、使役の形になっている点に注意される。口に能動的に少しずつ入れる表現ではなく、相手の口に強制的に入れさせることを目的とする表現であるので、その飲む過程に視点がある「すする」ではなく、無理やり口に入れてしまうという結果を重視した「のむ」がふさわしいと解釈される。

以上より、本稿で考察した6箇所の異同は、6つの用例中3例の対象物が粥であり、1例が汁であった。残りの2例中、1例はNo.34の例で、得体の知れない固形物が入っ

ている水であることや、大きな箱を引き寄せ、箱に自分の口を寄せて、恐る恐る得体の知れない液体を口に入れている状況であり、固形物の入っている水を少量、吸い込んだと考えられる例であったので、「すする」が適切であると判断した。最後の1例は、対象物が湯であり、判断しがたい部分が残ったものであった。その「食後において湯を飲む」という動作を行った際の器や状況を文化背景や、類似場面の用例を見つけることで、今後再解釈することも可能であるかと思われる。

ここでは上記のように「すする」の用例を解釈した。ただ別の見方をしてみると、当時の「すする」の用法そのものは、実は、現在とあまり大きく異なっていなかったのかもしれないと見ることもできるかもしれない。しかし、中古・中世の「すする」の全用例を今回検討した範囲においては、「すする」を使った表現は、粥、血、固形物の入った汁などの極めて限られた対象を取った、限定された表現でのみ現れていた。その点を考慮すると、実際の当時の単語の意味レベルとはまた異なる「表現のレベル」という観点から見た場合、文字による表現や使用範囲というものは、当時の文字言語においては、今回見た用例の範囲に極めて限定されていたものだったと解釈してみることは、十分考えられるのではないだろうか。つまり「文芸的表現」としての問題である。そのような、文字で表現され得た範囲という点でみるならば、今回「すする」の訓として推定した範囲は、文字によって表現された情報（文字言語としての実例）としては、妥当なものであったのではないかと、とも思われるのである。

本稿を書くにあたって、『今昔物語集』以外の作品についても調査を行ったが、「すする」という動詞の用例は大変少なく、「すする」の使用は、限定されていることが分かったものの、対象物や状況の限定が難しかった。啜る際の音がキーワードとなっているが、より詳しく特定していくためにも、時代や資料のジャンルを広げ、用例数を増やすことでより精密に分析していくことができるであろう。

なお、粥については、『今昔物語集』の全例が「すする」であり、他作品の「すする」でも粥が多く挙がっていたものの、一方、当時、粥に対して「のむ」という表現が可能であったかどうかについては、今回は調査が及ばなかった。今後の課題としたい。

## 注

- 1 34作品は、次に挙げるもので、( )の中は、「飲む」の用例数である。  
 平安：「竹取物語」(0)、「土佐日記」(2)、「伊勢物語」(5)、「平中物語」(2)、「大和物語」(4)、「三宝絵詞」(10)、「多武峰少将物語」(0)、「篁物語」(0)、「宇津保物語」(12)、「蜻蛉日記」(4)、「落窪物語」(1)、「和泉式部日記」(0)、「枕草子」(7)、「源氏物語」(2)、「紫式部日記」(0)、「堤中納言物語」(0)、「夜の寝覚」(0)、「濱松中納言物語」(0)、「更級日記」(2)、「狭衣物語」(0)、「大鏡」(0)、「讃岐典侍日記」(0)、「とりかえばや」(0)

(16)

軍記：「平家物語」(26)、「保元物語」(2)、「平治物語」(7)、「義経記」(8)、「曾我物語」(14)、

説話：「打聞集」(0)、「古本説話集」(4)、「宇治拾遺物語」(23)、「十訓抄」(8)、「古今著聞集」(36)、「沙石集」(24)、「唐物語」(0)、

中世のその他：「栄花物語」(3)、「梁塵秘抄」(0)、「今鏡」(0)、「水鏡」(4)、「方丈記」(0)、「海道記」(3)、「徒然草」(14)、「太平記」(40)、「増鏡」(0)、

そのほか：「御伽草子」(40)、「雑兵物語」(10)

2 本文は『新日本古典文学大系』より引用。読み仮名も『新大系』による。

3 伊：『伊呂波字類抄十卷本』

### 参考文献

安部清哉・伊藤真梨子(編著)(2008)『『今昔物語集』訓釈語彙考—巻二十六注釈書訓釈異同表を利用した語義比較(ツツヤク・クジル)—』『人文』六 学習院大学人文科学研究所

禹旻穎(2010)「破碎語彙 コボル・コボツ・ヤブル(下二・四)・クダク(下二・四)の語義と『今昔物語集』における「壊」の訓釈小考」『學習院大學國語國文學會誌』第53号 學習院大學文學部國語國文學會

栗原さよ子・安部清哉(2009)「平安期の「祛」の訓タモト—『今昔物語集』の捨て仮名付きの「祛ト」をめぐる—」『学習院大学大学院 日本語日本文学』第5号 学習院大学大学院人文科学研究科日本語日本文学専攻

日野資純(1972)「『今昔物語集』における動詞の反復表現—「カヘスカヘス型」の反復形を中心として—」『人文論集』23 静岡大学人文学部

日野資純(1986)「今昔物語集の異訓処理と類義語の意味分析—「後」と「前」を例として—」『国語研究論集 松村明教授古稀記念』明治書院

日野資純(1990)「シタ・モト・シモの類義関係—今昔物語集「下」字の異訓」『語源探求』2 明治書院

日野資純(1994)「「うへ」と「かみ」再論—今昔物語集「上」字の訓を中心に—」『静岡英和女学院短期大学紀要』26 静岡大学英和女学院

日野資純(2002)「今昔物語集のニグとノガル—類義語研究と古典解説」『国語と国文学』第79巻12号(949) 至文堂

日野資純(2003)「「廻(メグ)り行(ユ)ク」「廻(メグ)り行(アリ)ク」「廻(メグ)り行(アル)ク」等—今昔物語集の異訓統一を考える—」『国語学』第54巻2号(213) 日本語学会

日野資純(2006)「短信「アサユフ(朝夕)」か、「アシユフベ(朝夕)」か—今昔物語

- 集の異訓』『日本語の研究』第2巻4号(227) 至文堂  
 日野資純(2007)「『急ギ行ク／急ギテ行ク』等の区別—今昔と源氏を中心に」『国語と国文学』第84巻10号(1007) 至文堂

### 注釈書

- 山田忠雄・山田英雄・山田俊雄(校注)(1959・1963)『今昔物語集1～5』(日本古典文学大系) 岩波書店  
 馬淵和夫・国東文麿・今野達(校注・訳)(1970～1975)『今昔物語集1～4』(日本古典文学全集) 小学館  
 阪倉篤義・本田義憲・川端義明(校注)(1978～1985)『今昔物語集』(新潮日本古典集成) 新潮社  
 今野達・小峯和明・池上洵一・森正人(校注)(1993～1999)『今昔物語集1～5』(新日本古典文学大系) 岩波書店  
 馬淵和夫・国東文麿・稲垣泰一(校注・訳)(1999～2002)『今昔物語集』(新編日本古典文学全集) 小学館  
 小峯和明(2001)『今昔物語集索引』(新日本文学大系) 岩波書店
- 市古貞次(校注)(1958)『御伽草子』(日本古典文学大系) 岩波書店  
 渡邊綱也・西尾光一(校注)(1960)『宇治拾遺物語』(日本古典文学大系) 岩波書店  
 増田繁夫・長野照子(編)(1975)『宇治拾遺物語総索引』清文堂出版  
 宇津保物語研究会(編)(1973～1982)『宇津保物語 本文と索引』笠間書院  
 深井一郎(編)(1973)『雑兵物語研究と総索引』武蔵野書院  
 江口正弘(編)(1979)『海道記 語彙及び漢字索引』笠間書院  
 江口正弘(1979)『海道記の研究』笠間書院  
 榊原邦彦・藤掛和美・塚原清(編)(1988)『御伽草子総索引』笠間書院  
 西端幸雄・志甫由紀恵(編)(1997)『土井本太平記 本文及び語彙索引』勉誠社

### 古辞書

- 中田祝夫・峰岸明(編)(1964)『色葉字類抄 研究並びに索引』風間書房  
 正宗敦夫(編纂・校訂)(1954～1955)『類聚名義抄』風間書房  
 望月郁子(編)(1974)『類聚名義抄 四種声点付和訓集成』笠間書院  
 尾崎知光(解説)(1986)『三寶類聚名義抄 鎮国守国神社蔵本』勉誠社  
 土井忠生・森田武・長南実(編・訳)(1980)『日葡辞書 邦訳』岩波書店

### 辞書

(18)

上代語辞典編修委員会（編）（1967）『時代別国語大辞典 上代編』三省堂

室町時代語辞典編修委員会（編）（1985～2001）『時代別国語大辞典 室町時代編』三省堂

中村幸彦 他（編）（1982～1999）『角川古語大辞典』角川書店

日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部（編）（2000～2002）『日本国語大辞典 第二版』小学館

## 付記

本稿は、学習院大学大学院の次の授業における発表を元にし、その後の御助言をいただいでまとめ直したものである。「平成22年日本語史特殊研究（安部清哉教授）—漢字仮名交り文（今昔）・和漢混交文（平家）と中世日本語—」。

なお、本稿は、次の研究成果の一部でもある。平成22年度学習院大学計算機センター特別研究プロジェクト「『今昔物語集』の訓データベース作成と語彙の基礎的研究」（安部清哉代表）